

鈴木 尚●

十数年前に欠損歯列を独自の臨床的手法で分析し出版した著者が、さらに新しい視点を加えた本書を上梓された。著者の創案になる「咬合三角」という分析図は、日本補綴歯科学会では既に市民権を得た方法論であるが、それを初めて書籍として世に発表された前著（『欠損歯列の臨床評価と処置方針』医歯薬出版刊）は、初心者にとっては幾分難解な部分も存在しただろう。本来、既にあるものを伝えることは案外容易いものだが、全く新しい構想から論を拓き、分かりやすく解説するに至ることはなかなか困難なものである。本書は「症例でみる……」というタイトルでも分かるように、豊富な症例と図表を提示することで「分かりやすく解説する」という点に重きが置かれている。まずはぜひ、本書を手にとってご覧頂きたい。そうすれば難事を見事に克服していることが、誰にでも実感できるはずである。

4編に分かれた内容も基礎理論編と臨床応用編、症例分析集、そして基礎理論を十分に理解するための用語解説で構成され、全編をまとめて「欠損歯列学」の体系をなしている。つまり「宮地欠損歯列学」の基礎から応用までを順序よく学べるように配慮されているのである。

第1編の「欠損歯列をみる目」では、咬合三角の基本を分かりやすく説明している。まずはこの編を熟読することをお勧めしたい。そうすることで、著者が欠損歯列の何を問題にしてどのような目標を考えたのかが十分に理解できると思う。編の冒頭にパーシャルデンチャーや局部床義歯は欠損補綴の手段であり、欠損歯列の分析よりも先に論じられる不条理を指摘したE.Kolberの提言に納得したと回想している。もっともな事と思うが、30年前の歯科臨床では当然の事と捉えられ、誰もそのことを疑い得なかったことも事実である。それに疑問を持つ著者の探求心には、非凡な研究者魂を感じさせるものがある。そして我々は、そのような「知の着想」を知る時、小さな臨床的疑問が大きな論理を構築する原動力になっていることを学ぶことができるのである。



症例でみる
欠損歯列・欠損補綴
レベル・パターン・スピード
宮地建夫 著
A4判変型 140頁
定価 12,600円
(本体 12,000円+税 5%)
医歯薬出版株式会社刊

もちろん著者の研究指針はそう簡単に煮詰まったものではないだろう。症例が示す変遷のなかで発見された事象を基に、周到に計画された思考の産物であることが分かる。自分が手がけた多数の症例を観察しつつ、その経過を年月を惜しまずに熟成させ、さらにそれらを分析手法に晒すことは誰にでもできることではない。おそらく何人も近寄ることのできない努力の賜物であると想像できる。

第2編の「欠損補綴をみる目」では、第1編で分析した症例の病態に基づき、現状の維持と咬合の再建をどのような要件のもとで果たすべきかを論じている。目標は上顎前歯を失わないというターゲットを示しながら、ほぼ全ての提示症例に第1編で解説された咬合三角と歯の生涯図が添付されている。どの症例も数十年の記録が残されており、いずれも経過の要因として考えられる様々な解析がなされている。第3編に提示された17の症例も基本的に咬合三角のレベル別に構成されており、著者の詳細な分析によって予後の要因が推測されていて、とても理解しやすい内容になっている。全てが長期の経過症例であり、どの症例内容も必ず読者が興味を示すようなものばかりであろう。

欠損歯列を理解し、それを欠損補綴に応用する術を十分に学べる著作であるが、良書としてのもう一つの理由は、臨床研究の手法も学べる書であるということをつけ加えておきたい。

(すずきひさし 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町15-17 ASK日本橋ビル3階 ナオ歯科クリニック Tel: 03-3667-6432)